

第三十一回和辻哲郎文化賞 学術部門受賞作

石川 求 著 『カントと無限判断の世界』

(2018年4月10日 法政大学出版局)

石川求 いしかわ・もとむ 首都大学東京大学院人文科学研究科教授

1958年(昭和33年)5月12日生まれ。60歳。北海道網走郡美幌町出身。

専門は近現代ドイツ哲学。

1981年(昭和56)3月、北海道大学文学部哲学科西洋哲学専攻卒業。1981年(昭和56)4月、東北大学大学院文学研究科博士前記課程入学。1983年(昭和58)4月、東北大学大学院文学研究科博士後期課程進学。1987年(昭和62)4月、東北大学大学院文学研究科博士後期課程において日本学術振興会特別研究員(～1988年8月)。1987年(昭和62)8月、同課程単位取得退学。1987年(昭和62)9月、秋田工業高等専門学校一般科目講師。1992年(平成4)4月、同助教授。1993年(平成5)11月、文部省在外研究員としてドイツ・ベルリン工科大学人文科学部で研修(～1994年8月)。1997年(平成9)4月、東京都立大学人文学部助教授。2001年(平成13)4月、ベルリン自由大学哲学科で研修(～2001年9月)。2008年(平成20)4月、首都大学東京都市教養学部教授。2016年(平成28)1月、京都大学大学院文学研究科で博士(文学)の学位取得。2018年(平成30)4月、首都大学東京人文社会学部教授。2018年(平成30)7月、ベルリン自由大学図書館で研修(～2018年9月)。

共編著に、『世界市民の哲学』(2012年、晃洋書房)、共著に『グローバル・エシックスを考える―「9・11」後の世界と倫理』(2008年、梓書房)など。共訳書にトゥーゲントハットほか『論理哲学入門』(2016年、ちくま学芸文庫)など。

## 受賞のことば

通知の電話をいただいたとき、驚きの次に襲ってきたのは、強烈な居たたまれなさだった。しかし、さすがに分かってはいる。隠れられる場所などどこにもありはしないと。無謀そして無惨にも、哲学から二度、逃げ出そうとした過去がある。最初は二十歳のころ。学科の選択を迫られ、西洋哲学専攻ではなく中国文学と書いて出した。漢語すら履修しておらない不心得者は当たり前拒絶された。もう一つは三十代の中ごろ。体力の絶頂にあり、昼も夜も物見遊山と酒食の誘惑に溺れた。活字すらろくに読まなかった。その付けを日々の勤務で償うべく秋田に骨を埋めようと覚悟を決めた矢先、とつじょ東京の職場に呼ばれた。その理由はいまだに分からないままである。こんな男が、かなり遅いこの歳になってもものした生まれて初めての単著、ただそれだけなのだ。和辻哲郎は不死鳥である以前に勉強の虫だった。佳名に泥を塗ってはいまいか。やはりどう転んでも居たたまれない。

## 《選考委員評》

野家 啓一

「神は細部に宿る」と言われる。石川求氏の『カントと無限判断の世界』は、カントが「判断の質」について書き残した一段落、正確には否定判断と無限判断を分かつ一文字にこだわりぬき、綿密な考察を通じてカント解釈に新生面を開いた、文字通りの力作である。氏はまずヘルマン・コーエンをはじめとする研究者たちが、カントの無限判断をめぐる表現のわかりにくさに業を煮やし、ついには原テキストの「改訂」に至っている現状を厳しく批判し、否定判断（反）と無限判断（非）の差異を明らかにすることによって、カントの真意を焙り出そうと試みる。そこから両者の区別が、古代から近代までを貫く西洋哲学の根柢に伏在する問題であることを闡明し、大胆な哲学史の読み換えを迫る。以上のような第3章までの議論は、従来の通説を綿密な考察によって逐一論駁し、それによって視界の霧が少しずつ晴れてくるような論証であり、読む者にスリリングな思いをすら抱かせる。読み進むうちに興奮すら覚える、近来まれな哲学的達成である。

続く第4章以降では、前半部で得られたカント解釈の成果を、「啓蒙とはなにか」や「永遠平和のために」などカントの社会哲学方面の著作にまで拡張することを企図し、さらにその到達点を「反A」ではない「非A」を浮き彫りにしようとする「非一元論」として特徴づけることを試みる。氏の問題提起そのものは刺激的かつ示唆に富むものである。しかし、行論にはややもすると牽強附会と見える箇所も散見されることから、今後の論証の補強を望みたい。

また、望蜀の言ではあるが、判断論の枠組みからは外れるフレーゲやウィトゲンシュタインについての言及は、やむをえないとはいえ表面的に過ぎ、否定や無限の問題を俎上に載せるならば、直観主義論理における否定の機能や超限帰納法との連関にも目が向けられたならば、現代哲学との関わりも見えてきたものと惜まれる。いずれにせよ、和辻哲郎賞に相応しい優れた作品が得られたことを喜ぶとともに、著者の今後の研鑽と活躍を心から期待したい。

関根 清三

問題は小さい。カントが無限判断の例として挙げた一文が、“Die Seele ist nicht sterblich.” だったのか、それとも“Die Seele ist nichtsterblich.”だったのか。つまり nicht と sterblich の間に一字あけるか否かの数ミリの違い。前者なら「魂は可死的ではない」という否定文となり、後者なら「魂は不死的である」という肯定文となる。カントが否定判断の例として挙げているのは前者であり、それと対比される無限判断も同じ文章では具合が悪い。いわんやカント自身、無限判断が論理形式としては肯定形を取ると注釈するにおいておや。そこで『純粹理性批判』のアカデミー版は、これはカン

トによくあるうっかりミスで、元来後者のはずだと校訂し、各種の邦訳は全てそれに従ってきた。しかしそれは果たして正しいのだろうか。石川求氏の受賞作『カントと無限判断の世界』がこだわるのは、一見いかにも小さな、そして我々の日常と掛け離れた、この問題である。

しかし、この一点に集約される問題の深度と広表は、いかにも甚大である。そのことを氏は、パルメニデス、プラトン、アリストテレスからマイモニデス、スピノザを経て、ヘーゲル、ハイデガーに至る哲学史を紐解きながら、見事に解明していく。また日本人の翻訳と注釈との対決も勇ましく、しかもカントと同時代人の諸注解の出来不出来を精細に検討しつつ、**nicht sterblich** のままでよいという自説の傍証を固めていくのである。

その結果明らかになるのは、例えば次のことたちである。「S は非 P である」を「魂は不死である」といった常識的なレベルで誤読したコーエン以降、哲学史の表から姿を消していた無限判断の真面目が実は、単に「可死的なものではないもの」が肯定的な述語だという論定にあるのではないということ。むしろその眼目は、魂に関して「可死的なもの」を問題領野から否定排除するという主張にこそ存するのだということ。換言すれば、否定判断の否定は「青は緑でない」のように「反」の否定であるのに対し、無限判断のそれは「青は整数ではない」のような「非」の否定であり、或るものが様々なカテゴリーの<無限>の否定の虚空の中にぼつんと存在するということを見据えているのだということ。そしてその再発見によって、カント哲学の物自体や世界市民等の大きな構想も、正しく読み直し得ること。更には古代から現代に至るまで無限判断の哲学は、無限の否定性に取り囲まれている我々の現実を洞察し、その洞察にもとづいて人が自らを脱中心化し一元論的傲岸を超えることを、促してやまないこと。如何にも卑小な問題に見えたこの数ミリの攻防は、実はそうした豊かな実を結ぶ壮大な思考に開いているということ、本書は、カントを軸に据えた古代から現代に至る様々なテキストの歯切れよい読解の積み重ねを通して、次第に明らかにしていくのである。

選者はカント哲学の門外漢に過ぎず、石川氏のこの果敢な挑戦が今後、我が国の端倪すべからざるカント研究者たちから反論されないと言い切る自信はない。しかしこれだけ文献学的に独創的で哲学的に本質的な学説を精緻に主張する研究を発見顕彰することにこそ、学術賞の役目の一つはあるのであって、受賞作が更なる論争を巻き起こすならば、それは選者冥利に尽きるというものであろう。そして石川氏は本作において、そうした論争に應對するだけの、緻密な論理と鋭い表現、また豊富な哲学史的知識と多彩な資料読解の、稀有な能力を兼備していることを既に実証しておられるのである。

黒住 真

石川求『カントと無限判断の世界』について、私自身はカントの専門家ではまったくないので、その評価する内実は、より専門の方々に譲りたい。ここでは、大掴みに読みながら、本書の意義について、さらに哲学・倫理思想一般の側から評価してみたい。

「無限判断」というと、人間の判断の運動が、物事に無限に向かつて拡張するかのように屢々考えられてしまう。しかしカント『純粹理性批判』における「否定的思考」は、そうではない。かかる拡張が「ない」いわばあり得ない。そのことで人間の思考を意味づけるのである。これをめぐり、本書の前半は、これまでのカント論をとらえ直し、古代のプラトンから二十世紀のウィトゲンシュタインまでの論理を関係づけていく。この古代から現代までの総体的な哲学は、私にはホワイトヘッドを連想させる。ただし、石川氏は、プラトンよりアリストテレス的であり、まさにカントによって個々の哲学やその記述を位置づけている。この広い視野と問題意識は示唆するところ大きい。

後半では、近代的な社会において、このカントの論理が、いわば全体主義への批判であって、公私の別であり、他者の先在である。その先在から、自治論や世界市民が出て来る、という。また『道徳の形而上学』や『永遠平和のために』をさらに引く。ここに示されたものは、ハイデガーがいかにかントを引こうとも、ハイデガー的全体性＝世界像とは違っているのである。では、そのカントの世界は何だったのか。本書は最後に、カントに、光への沈黙があり、永遠の真理・神の連続性を「撤廃」する。そこに「裂け目」があると指摘する。では「裂け目」の内実は何か。これは本書に入って読者それぞれ読み込み考えたらと思う。

この最後は、本書を離れて、カント論としてどうか。よく知られているように、『実践理性批判』の「結び」は「たかまりくる感嘆と畏敬の念をもって心を満たすものが二つある。我が上なる星の輝く空と我が内なる道徳律」とある。また『判断力批判』からの展開も美学や芸術論などへと展開する。

和辻賞に関わるカント論として、受賞書『カントと神 理性信仰・道徳・宗教』（宇都宮芳明）1998、『カント『判断力批判』と現代一目的論の新たな可能性を求めて』（佐藤康邦）2005がある。また選考論者の書としては、『理性の不安—カント哲学の生成と構造』（坂部恵）1976がある。本書の「裂け目」から、坂部氏の「不安」、宇都宮氏の「神」、佐藤氏の「目的論」の方向がある。それらはカントにとっての、規定されたのではない具体的な宇宙が何なのか、に繋がるようである。

近代日本哲学と関係づけるならどうか。本書は、そこにある述語論には共感するようだが、田辺元、西田幾多郎は、「反転的抽象」だという。この指摘はそうだと私自身同感した。ただ、さらにいうと、和辻哲郎には仏教と結び付けるカント論があり、岩下壮一は、中世哲学と唯物論との微妙な位置にカントをとらえ、三木清は、カントの判断力から、構想力の論理による、種々の物語り解釈を導き出す。高坂正顕は人間学が最後なのだ、ととらえる。そこに理性だけでないエネルギーも力動のように関係しているらしい。

本書の次の展開がどうなのか。カント論、哲学史論として、さらに道筋を見せていただければ、と期待する。「裂け目」にまさに踏み込んで下さった本書は、今後の議論のよき手掛かりを与えて下さっている。石川氏の本書は、ひとつひとつにさらに関係していく。かかる普遍的な課題を与えて下さったことに心身より感謝したい。